
犬死

はち味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬死

【Nコード】

N6374Y

【作者名】

はち味

【あらすじ】

人の言葉がわかる犬と二人の少年の物語。

犬とその飼い主（前書き）

これはまだ未完成の作品です。

完結するまでにながらりと物語が変化していくことがあります。

ご注意ください。

犬とその飼い主

「くそババア！」という罵声ごときが聞こえても、あたしはなんとも思わない。

それがボクの飼い主の言葉だ。

ボクと一緒に散歩しているだけで、「くそババア！」と、自分よりひと回りも小さい子どもに罵られる老婆。

それがボクの飼い主だ。

飼い主はいつも怒ったような顔をしている。四六時中、いつも。とはいえ、飼い主が家の中にいるときは、その顔を確認できないので、どんな表情をしているのかわからない。

けれど少なくとも、ボクと一緒にいるときは、喜、哀、楽のどの顔も見せない。怒の一点張りなのだ。

態度も立ち振る舞いもそっけない。他人が喋りかけてきても、相槌は打たない。うなずきもしない。あるうことか、とある条件下において、飼い主は他人に向かって大声を張り上げる瞬間がある。マジギレするのだ。

そんな破天荒な飼い主だからボクが飼い犬になったときから（あるいはそれ以前から）、近所に話し相手はいない。いや、どこにもいないと言いかえたほうが正確だろう。

ともかく、孤独な人なのだ。厳しく言えば、嫌われ者だ。飼い主

の味方は、この世に誰一人として、いない。

しかし、一匹の味方が、いる。

それがボクだ。

たとい何があろうと、ボクはこれから先もずっと飼い主の味方でありつづけることを心に誓っている。この首のリングにかけて。なんて、さつき家の中から聞こえてきたせりふを真似てみたりして（語弊がないように言っておくと、もちろんこれは本心だよ）。

突然がらりと引き戸が開く音がして、ボクは聞き耳を立てた。もう散歩の時間か。

鍵を施錠する音が聞こえたのち、玄関先に飼い主が現れた。ボクはとっさに体を起こして、犬小屋から出る。

「今日もついてくんのか、このクソ犬は」

あきれたような口調でそう言っ、て、飼い主は横目でボクを見る。きつい顔、きつい言葉。このお決まりの言動。ボクは毎日これを見聞きするために、犬小屋の中で寝そべっている。

ボクは、「わんっ！」とひと吼えして、飼い主のそばに駆け寄った。今日も飼い主、線香の匂いがする。

飼い主は、「ふんっ」と不機嫌そうに鼻を鳴らして、歩き出す。ボクはその横に並ぶ。

本日、二度目の散歩。散歩、別の言い方をするなら見回りだ。近

所の見回り。

だけどこれはお巡りさんのように、お金をもらう代わりにやっている仕事じゃない。飼い主とボクが、勝手気ままにやっていることだ。

空から降りそそぐ月の明かりと民家からこぼれる光を頼りに、夜道を二歩ずつボクは進む。飼い主の歩幅、歩く速さに合わせて、まっすぐに進む。

ボクの首輪には、一般の飼い犬たちとは違い、ひもがついていない。道行く人の中にはボクの姿を見た途端、おびえた顔になって、すれ違いざまに飼い主を睨んでいくことがある。非常に失礼な人だ。このボクにかぎって、見知らぬ人に危害を加えるようなことは絶対にしないのに。もう二度と、そんなことはしないと心に決めたんだ。

じやりの敷き詰められた地面を通り過ぎて、コンクリートの道路に出た。ここを左に曲がる——と思いきや、飼い主は右に曲がった。

いつもの進路と違う。

ボクは困惑した。そっちには、ボク専用のトイレはないからだ。知らぬ犬の尿の臭いがする。

そんなボク的心情は知らぬという様子で、飼い主はどんどん歩いていく。ボクは飼い主の行く方を追いかけた。

トイレの心配をすればするほど、局部のあたりがむずむずしてきた。まるで下腹部に氷を入れられて、それが徐々に溶け出したかのような感覚だ。足が地面をとらえるたびに、溶けた水は一ヶ所に集

中する。敏感な部分に。

だが、まだまだ我慢はできる。それに、いざとなれば無臭の障害物めがけて排泄すればいいだけの話だ。マーキングもかねて、一石二鳥のプランだ。

気持ちを新たに、ボクは前方を見る。幾数の電灯が道路の脇に立って、真下に光を照らしている。どうぞここで用を足してくださいと言わんばかりに。ボクを誘うように。

勝ったな、と思った。同時に、人に感謝した。便利なものを作ってくれてありがとう、と。

しかし同時に、あることに気づいてしまった。スポットライトを浴びながら、そのスポットライトを支える電柱に尿をかけるというのは、いかななものか、と。

人の世界には、礼儀というものがある。挨拶を交わしたり、握手を交わしたり、色々な礼儀が存在することを、ボクは何度も見てきた。

ボクも以前、ある人たちに礼儀の作法を教えられたことがある。

「お座り」と言われたら、後ろ足をたたむ。

「お手」と言われたら、前足を出す。

「おかわり」と言われたら、お手の逆の手を出す。

これらの作法を実践すれば、人はたちまち笑顔になって、とても

喜んだ。ときにはご褒美をくれた。今はもう、あのとき覚えた作法を使う場面は、ほとんどないけれど。

だが、だからこそ、今が礼儀をはたすチャンスじゃないだろうか。まあ、別に放尿を我慢しただけで、人は笑顔にならないし、褒美はもらえないけれど、感謝を態度で示すのが、ボクは何よりも気持ちいいのだ。

せめて光を発しない障害物まで、せめて光を発しない障害物まで。

ボクは心の中でそう繰り返しながら、歩みを進めた。

電柱におしっこ

その数分後。飼い主はあからさまに嫌な顔をして、「……早くしろよ」と言った。

ボクは円錐型の光の中心で片足を揚げて、放尿の快楽にひたっていた。我慢のあとの小便が、何よりも気持ちよかった。無数の虫の声が、ボクに声援を送っているような気がした。気がしたのだ。

負けたな、とは思っていない。またしても気づいてしまったのだ。ボクが礼儀を尽くすのは、特定の人だけだったということに。

つまり現時点での特定の人というのは飼い主ただ一人だけでありボクが放尿を我慢することによって歩く速度が遅くなり同行している飼い主に迷惑をかける可能性がある以上だんじてこれ我慢はよくないよね、という結論に達したのだ。このロジック。どう？

理論派を気取りつつ、片足を揚げた状態で、はい、ポーズ。決まったね。

「……先、行くぞ」

との声がして、ボクはあわてて飼い主の背中を追った。まだ途中だったのにもかかわらず。あっ、後ろの右足に少しかかった。

ともあれ、夜の散歩はのどかで良い。ときおり、ボクらのすぐ横を猛スピードで通り過ぎて行く自動車が怖いけれど、日中の散歩よりはマシだ。日中は人通りが多い。人通りが多いと、気の滅入ることが多くて困る。飼い主に対する悪口を聞くのは嫌いだ。

前方に人影が見えた。影の輪郭や動きから推察するに、おそらく老人だろう。真正面から、なおかつシルエットだけを見ても、腰が曲がっているのがわかる。

人影と間近に接近した。やはりボクの予想はあたっていた。影の正体は老婆だった。老婆はボクを見下ろして、「まあ、かわいいワンちゃん」と、顔をしわくちゃんにしてほえんだ。

「このワンちゃんは、なんて名前を……」

老婆は言いかけて、やめた。飼い主の顔を見て、とまったのだ。ボクらは、その場に硬直した老婆を置き去りにして、歩きつづける。

ふとして、ボクは飼い主を見上げた。飼い主は、まるで背中を棒を張り付けたように背筋を伸ばして、きびきびと手足を動かしている。飼い主とさっきの老婆、二人の顔だけを見比べれば、それほど歳は離れていないように思う。しかし、拳動や姿勢には大きな差があつて、この差はいつたいたんだろうと考えるに、さきほどの老婆はおだやかな顔つきをしていたのに対して、飼い主ときたら大しけの海原よりも消えない波を顔に作っているゆえ、周囲の人に与える印象の差は歴然で、かたやみなに好かれる優しいおばあさん、かたや子どもにまで憎まれ口を叩かれるおばあさん、とどのつまり、ボクがなにを言いたいのかというと、憎まれっ子世にはばかるという有名なことわざがあり、その言葉を拝借して結論を導き出すと、飼い主が年齢の割にやけに元気なのは……、と答えを出す寸前で、右の前足に激痛を感じた。思考中断。見やると、飼い主のくつが、ボクの足の上に乗っかっていた。

「……悪い、つまずいた。もう私も、そろそろ歳かもしれん」

飼い主は白々しくそう言って、ずんずん前に進んでいく。偶然、なのだろうか。もしくは、ボクの気持ちがわかるのかもしれない。だったら、嬉しいな。足はちょっぴり痛かったけれど。

痛みにしびれる足を引きずりながら、ボクは飼い主の隣に並んだ。

不意に、妙な臭いがした。生ゴミのような、腐臭。前進するにつれて、その臭いはますます強くなって、ボクは吐き気を覚えた。

なるべく臭いを感じないように鼻呼吸を抑えてさらに進むと、道端にゴミがばらまかれていた。無残に引きちぎられたビニール袋。その中から柑橘系の果物の皮とティッシュがはみ出ている。

歩みをとめる、飼い主。

ボクも立ちどまった。耳をすますと、がさがたと物音がした。

近くに電灯がないため視界が悪くてわかりにくい、前方には老朽化した木で作られた囲いがある。ゴミ捨て場だ。

そこになにかがいるようなのだ。人間か、あるいは猫か、それとも。

ボクは慎重かつ繊細に、薄氷をふむような思いで、足音を立てぬよう地面をふみしめる。このように得体の知れない生き物に遭遇した場合、極力相手にこちらの存在を悟られないよう接近して、その正体を把握したのち次の行動に移る、というのが最良の策だと思うから。インテリジェンスなボクならではの、頭脳的策略だ。

しかし、そんな策略をけ散らす存在が隣にいた。飼い主は、まるで自分の存在を周囲に示すかのように、荒々しく地面をけつた。

途端、物音が消えた。夏虫の鳴き声の音量が一気に大きくなる。

当然だが、得体の知れない生き物がこちらに気づいたようだ。すぐに逃げ出さないことを考えると、こちらの出方をうかがっているのかもしれない。

この場面では相手を警戒させてしまうような挙動は絶対に避けるべきだ。なるべく穏当に、距離を取って速やかに場を離れることがお互いのためになるだろう。衝突、争いは双方にとって損だ。なにも生まれない。だから……って、あれ？

飼い主？　ちよつと！？

ボクの考えに反して、飼い主は飄々と正面に突き進む、わが道をゆく。つもりなのかどうかは知らないが、それ以上先に行けば間違いなく攻撃される。安全は保証されない。

「わんわんっ！」

ボクはとつさにほえて、危険を知らせようとした。が、飼い主の手足はノンストップ。やめられない、とまらない。

ついに危険地帯に足を踏み入れる——すんでのところでその場にとどまった。

どこからともなく、低音の唸り声がした。犬が威嚇するとき出すような声だ。

ボクは急いで飼い主の隣に駆け寄って、その声の正体を視認した。牙をむき出しにして、唸り声を上げていたのは小柄な犬だった。体毛の色から判断するに、日本犬の雑種だ。首輪はない。ちょうど、えさを求めてゴミ捨て場を漁っていたところだったのだろう、牙に生肉の破片が引っかかっている。

すぐに襲い掛かってこないことを考えると、この雑種は自分の力量を理解しているようだ。

自分より体の大きな犬と、それをさらに体格で上回る人間と対峙して、勝てる見込みはない。けれど、決して弱みは見せない。

まだまだ若造に見えるが、頭の悪い犬ではなさそうだ。世渡りの術を心得ている。

「……ちっ」

なぜか舌打ちをして、飼い主は肩にぶら下げた小汚いバッグから棒状の白い物体を取り出した。それは骨に模したスナック菓子だった。ボクが大好きなおやつだ。犬専用のやめられない、とまらない、あれ。

なんて、言っている暇はない。このパターンはだめだ。またしても、ボクのおやつがなくなってしまう。唯一の楽しみが！

「わんわんわんわんっ！！」

ボクはとっさにほえて、未来の空腹を知らせようとした。が、飼い主の手はノンストップ。ずっと背後に引いて、手前に投げ出した。

やめられない、とまらない。

骨は飼い主の手を離れて宙を舞い、放物線を描いて地面に落下。ごろごろと鈍い音を立てながら転がり、（ボクのだったはずの）おやつは雑種の目前で静止した。

雑種はたじろぐように半歩後ろに下がり、（ボクのだった）おやつを猜疑の目で観察している。

一方、飼い主はと言うと、そんな雑種の様子をじっと（にら）見守っている。

やがて、雑種が動いた。（ボクの）おやつに鼻を近づけて臭いを嗅いでから、ぱくりとかぶりついた。口元からよだれをしたたらせながら、ひたすらおやつを咀嚼している。

咀嚼、咀嚼、咀嚼。

あのおやつは、かみ始めてから数秒後にうまみのピークを迎える。……思い出すだけで、だ液が口の中いっぱいにあふれる。等しく、悔しさも胸いっぱいにあふれる。

と、ボクが気を取られていた刹那だった。

「……ふっ！」という力のこもった声と同時に、飼い主が突如、左足を上げて、したたかに地面を踏み鳴らした。

ボクは心臓が口から飛び出すんじゃないかと思うくらいびっくりした。いきなりなんてことをするんだ！健康診断の方のドックがしやすくなるじゃないか！

雑種も驚いたのか、瞬間的にその場から飛びのいた。そして、ふたたび唸りながら飼い主をねめつける。その目は、怒り半分、とまどい半分といったところだろうか。とても正しい反応だ。あいにくボクも同じ心境だから。

「さあ、とつととどつか行け！」

飼い主は怒気を含んだ声でそうわめきながら、二度、三度と地面を強く踏み、雑種を追い払おうとする。つい一分ほど前に、雑種にえさを与えた人物とは思えないような豹変っぷりだ。まあ、普段の言動からすれば、こちらの姿が真実とも言えるけどね。

飼い主の剣幕に圧倒された雑種は、危うくおやつ落としそうになりながら、小走りで暗闇に消えていった。

「……バカ犬が」

飼い主はそう毒づいて、大きくため息をついた。そうして、いきなりしゃがみこんで、辺りに散らばったゴミを素手で拾い集め始めた。

不意を打たれたので多少うろたえてしまったが、飼い主の突拍子のない行動には、ちゃんとした理由があることをボクはわかっている。この飼い主をただの人格破綻者と思うことなかれ。事情を知らない人の目にはそう映るかもしれないが、実は『わざと』このような役を演じているのだ。

詳しいことはボクにはわからないけど、飼い主がいわく、

「『野良が嫌う人間』と、『人間が嫌う野良』が平穏に共生しているために、私はこうしている」

とのことなのだ。簡単に言えば、『平和の使者』になろうとしているらしい。

ちなみにこの事実は、ボク以外に誰も知らない。「誰にも明かしていない」と飼い主本人が言っていた。

ボクがそんな思い出にふけっている間にも、飼い主は黙々と穴の開いた黒いポリ袋にゴミをつめこんでいく。

ひとしきり片づいたところで、肩をぐるぐると回した飼い主がこちらを一瞥して、「お手」と右手を差し出してきた。

ボクは迅速に目を逸らした。たまにありふれた主従的行動に出たと思いきや、とんだひねくれっぷりを秘めているから困る。誰がそんな汚い手に触れるものですかい。これでも潔癖症なのだ。年がら年中、ところ構わず四足歩行している生き物が言つのもあれだけだ。

「……はあ」

飼い主は大仰に息をはいて、すっと立ち上がった。

「これだからしつけのなっていない犬は」

明日のおやつ抜き、と言葉をつけ足して、軽い足どりで歩をきざんでいく。

さすがに、これにはあらがってもいいよね？

と、ボクは自分の心に問いかける。問いかけと言うより確認だ。いくら恩義のある飼い主と言えど、このやり口はあんまりだ。一回がぶりと手をかんでやらねば、ストレスで狂犬と化してしまうかもしれない。

まあ、もちろんそんなことはしないけどね。

ボクは、なにをされても、どんなことがあっても、飼い主と一緒にいられるだけで、それだけでいいのだから。

前の飼い主

「ママ！ あたしこの子がいい！」

透明のガラス越しに聞こえてくる快活な声。ほっぺたの真っ赤な少女が、左手で隣にいる大人の女性のズボンを引っ張りながら、右手でボクを指さしている。

女性はボクを見ると朗らかな笑みを浮かべて、少女の頭をなでた。

「みっちゃんが面倒をみるのよ」

「うんっ！」

少女はぶんぶん頭を上下させた。

そんなやりとりがあつたのち、見慣れた顔の男性がボクの入っているケースの鍵を開けた。

少女が、「わあっ！」と声を上げて、ボクの頭に触った。女性も膝を曲げてしゃがみつつボクの背中に手を置いた。

「ママ、気持ちいいね！」

「そうね」

少女と女性は顔を見合せて笑った。

二人がなでるのをやめると、ボクは見慣れた男性につかまれて、

鉄格子のついたかごに入れられた。鉄格子の間から見える男性の顔は、終始ほころんでいた。いつもこの人に食事をもらっていたので、ボクはこの人が好きだった。だから、この人が嬉しそうにしていると、それだけでボクも嬉しくなった。

「ご来店ありがとうございました」

かごに入れられたまま外に出た。視界が上下に揺れる。浮遊感がある。聞きなれない音が聞こえる。身にねっとりまとわりつくような暑さを感じる。舌がすぐに乾いてしまう。

外の空気に触れるのは久しぶり。かごに入れられて移動するのはこれが初めての体験だった。また、激しい危機感や不安を覚えたのも、このときが初めてだったのかもしれない。

「わんっ！ わんっ！ わんっ！」

不安がつのればつのるほど、わめきたい衝動にかられ、そうせざるを得なかった。かごのあちこちに頭をぶつけて痛くとも、暴れずにはいられなかった。すると、ますます舌が乾いた。やがてボクは暴れるのをやめた。

がたんと足元に衝撃を感じて、視界の揺れがおさまった。浮遊感もなくなった。目の前が少し暗くなった。鉄格子の外は、灰色一色の壁。他には何も見えない。匂いが変わった。今までに嗅いだことのない匂い。だが、決して不快なものではなかった。

しばらくすると、足下から轟音がした。同時に、身体が後ろに引っぱられて、とっさに四足でふんばった。

引っぱられる感覚がなくなり、気のせいだったのかと油断した瞬間、今度は前に引っぱられた。そしてさらには、前後左右不規則に引っぱられる始末。もう何がなんだか、訳がわからなかった。

そんな感覚にも慣れて、徐々にそれが楽しくなり始めた頃、強弱を繰り返しながら鳴りつづけていた轟音が消えた。

「ママー、早くわんちゃん降ろしてよ！ 早く早く！」

かすかにそんな声が聞こえた。

がちゃ、と金属音がして、灰色の壁が遠ざかっていく。ボクはまぶしくて、目を閉じた。またもや、生ぬるい暑さと浮遊感に包まれる。

ゆっくりと目ぶたを開けると、少女がボクの顔をのぞきこんでいた。少女は、にっと白い歯を見せて、こう言った。

「ようこそ！」

少女の背後には、とても大きな建物がそびえていた。真っ白の壁と真っ黒の屋根が特徴的な建物だった。

「あたしのお家へ！」

こうしてボクは、とある家族の一員になった。今の飼い主と出会った七年前の話だ。

家族の一員

「お家と呼ばれる建物には、パパ、ママ、みっちゃんの三人が住んでいた。」

大きい男性がパパ。大きい女性がママ。そして小さい女性がみっちゃん。それぞれが互いにそう呼び合っているのです、ボクもそう呼ぶことにした。もちろん心の中で、だけれど。

ちなみにボクは、みんなから「ポーチ」と呼ばれていた。最初に言い始めたのはみっちゃんだ。ボクと初めて会う人全員に、「ポチじゃなくて、ポーチ！」と得意げに紹介していた。

とある日パパが、ボクを見つめながら、「女性に喜ばれそうな名前だな」とおどけた感じで言っただけでママを笑わせていた。ママが自然な笑みを浮かべたまま、「ポーチの毛の色とおそろいのポーチが欲しいな」と呟くと、パパは苦い顔をして部屋を出て行った。このとき、お家で一番偉いのはママだということをボクは理解した。

お家に来た次の日から、ママと見知らぬ大きな男性によるしつけの指導が始まった。ボクは、お手、おかわり、お座り、待て、の順に教わった。

それらの作法を三日で覚えると、ママのそばで見えていたみっちゃんが、「ポーチ天才！」とはしゃぎながら、次は二足歩行をやらせようとした。みっちゃんは、他の犬にはまねできないような特技をボクに覚えさせて、自慢したかったようだった。

だが、三日、七日と経っても二足歩行ができないことを知ると、

みつちゃんはすぐに諦めてしまった。その判断は正しいと思った。なにせボクにはやる気が欠けらもなかったのだから。たぶん、やってできないことはなかったはずだけどね。

トイレの場所を完璧に覚えるまでに一週間かった。一日の排泄回数はおよそ八回。合計すると約五十六回。その内、二十回以上は怒られた。

ひるがえって、家族のみんながどうして怒るのかを理解したボクは、腹が立つと、リビングのど真ん中で後ろの片足をあげてやった。すると、みんながおろおろするのだ。その様相を見ると、ボクの怒りは自然に静まるのだった。

とはいえ、みんなはいつもボクに優しくしてくれていたので、腹が立つことはめったになかった。

お家に来てから一年もすると、ボクに対するみんなの態度が変わり始めた。

まずは、みつちゃん。前までは週に五回以上も散歩をしていたのに、今では週に一回になった。思い出したかのようにボクの頭をなででは、すぐにテレビ画面の前に行ってしまう。

パパと接する機会も減った。毎週、休日になると、家族みんなで広い公園に出かけたものだったが、その回数も著しく減った。パパの談によると、仕事が順調で忙しいらしい。

ママはほとんど変わらなかった。いやむしろ、みつちゃんやパパがやっていたボクとの散歩を、自ら率先して代役を務めるほどに可愛がってくれた。しかし悲しいかな、ママがしきりに、「ダイエツ

ト、ダイエット」という言葉を呟き始めたのも、ちょうどその頃。ママのお腹に背中を預けると、まるで水上に漂っているように、極上に気持ち良かった記憶がある。

だが、それから半年後、ダイエットに成功したママも、次第にボクを散歩に連れて行かなくなった。

ボクは、みんなから飽きられた。

けれど、飼い犬としての最低限の待遇は得られていたので、別に不満はなかった。ご飯は一日二食。お風呂は週一回。散歩は週三回。あるいは、これでも恵まれている方なのかもしれない。

それに、ボクはテレビさえ見られるのであれば、他はどうでも良かった。

その当時、テレビがボクの唯一の楽しみだった。

テレビを通じてたくさんの知識を得た。バラエティの笑いどころ、ドラマの泣きどころ、ニュースの怒りどころなど、人の文化を何となく理解できるようになった。

数あるテレビ番組の中で最も好きだったのは、コント番組だ。その理由は、みっちゃんが欠かさずコント番組を見ていたから、というもあるけれど、毎回ボクの期待を上回る斬新な内容に心を打たれたのだ。

視聴者（犬）の予想を意図的に誘導して、なおかつ最後に裏切るその手法は、「お見事！」の他に言葉はなかった。程度の低いことをやっているようで、実は高度なことをやっていた。知識を得れば

得るほど、彼らのコントが完成されていることにボクは気づいた。

また、コントは総じて、『人を笑わせる、楽しくさせる』目的で作られているというその純粋な姿勢に深く感銘を受けた。

誰も、悲しまない、悲しませない。それは素晴らしいことだと思った。

本当の犯人は！

ある日を境に、パパとママの様子が急変した。それはママの体重がリバウンドしてから三年後のことだった。

毎晩、パパが暗い顔で帰宅するようになった。

ママの口癖が、「節約、節約」になった。

二人は、料理の並んでいない食卓で深刻そうに会話をするようになった。ときおり、ほんのささいなことで喧嘩も勃発した。昔の人の作ったことわざの通り、とてもボクが食えるような代物ではなかった。

みっちゃんも少し変わった。小学五年生になってから、しきりにパパを避けるようになった。リビングでテレビドラマを見ている、パパが会社から帰ってくるや、途端に部屋にこもってしまう。部屋では友達と電話していることが多く、笑い声がときどきリビングまで響いてくる。

その声を聞くたびに、パパはビールを飲みながらため息をつくのだった。

みっちゃんとママが、それぞれ泊まりの用事で出かけているときのことだった。ボクはいつものように、フローリングの床にあごを乗せながらテレビをながめていた。近くのスファには酒臭いパパが座っていた。

「ポーチ。おいで」

唐突に、ずいぶんと久しぶりに、パパに名前を呼ばれた。ボクはテレビから目を離して、パパの顔を見た。

パパは珍しい顔をしていた。最近は何に何を寄せているところしか見なかったが、そのときは違った。まるで、数年前の、みっちゃんにしか向けることのなかった穏やかな顔。父親を知らないボクがこんな比喻をしていいものかわからないが、父親の顔、というやつだった。

「ポーチ」

おいで、とパパは繰り返した。

なんとも間の悪いことに、今まさにサスペンスドラマのストーリーがクライマックスを迎えていて、謎の犯人の正体が明かされようとしている直前だったゆえ、非常に気乗りしない命令であったが、飼主には絶対服従なので、ボクはしぶしぶパパの元に向かった。

「よしよし、いい子だ」

ほめられて、なでられる。しきりに、なでられる。誰かの分までなでられているのではないかと思うくらい、なでられる。がさつに、それでいて、愛情がこもっている手つきだった。

そんな最中にも、

『——— 本当の犯人は！』

と、お決まりのせりふがテレビから流れていた。ボクは聴覚に全

神経を集中させた。はたして物語の大詰めはいかに！

『——日下部史郎じゃない、そのの』『なあ、ポーチ。パパな』

パパは、テレビの音声にかぶせるように、

『■■■■だ！』『実は浮気してるんだ』

ぼろりと衝撃的な言葉をつぶやいた。犯人の名前は、ついに聞き取れなかった。

おっさん暴露

このおっさん、ボクを去勢しておきながらなんとけしからん、という怒りがふつふつとこみ上げてきた。

その反面、本音を言えば、まことに不謹慎ながら、どんなテレビ番組よりも現在の状況の方に興味を引かれていた。

だって、まるでコントじゃないか。

家ではパパを演じて、外では男を演じる。

毎朝ママに行ってきますのキスをする（しないけど）かたわら、よその女に心を奪われているのだ。そのギャップは、まさしくお笑い芸人の考案するネタのそれと同じだ。

ただし、パパの方は、浮気の実事が露呈したならば、家族のみんなを不幸にするオチが待ち受けている。コントとは違い、誰も笑わないし、笑えない。せいぜい笑うのは、仕事を請け負う弁護士か近所の噂好きの連中だけだ。

「まあ、こんなことをお前に言ってもわからないだろうけどな」そう言って、パパは乾いた笑い声をもらした。「だからこそ、こんなことを打ち明けられるんだよな」

——全国の奥様に朗報。もしも夫の気が浮ついているように感じたら、すぐに犬の首輪に盗聴器をしかけておくべきやで。夫は犬の前でしか本音を語らんからな。とくに中平さんのような家族に愛想尽かされた夫はな——

いつの日だったか、ある番組の司会を務める関西出身のお笑いタレントが、そんなジョークを言ってスタジオのギャラリーをわかせていた。彼の口から出る比喻はわかりやすく、往々にして真実をとらえていた。

でも、さすがにその冗談はネタだと思っていた。たったこの瞬間までは。

「ママにバレたら……どうなるだろうな」

パパはなでていた手を止めて、深く考えこみ始めた。

そんなの考えるまでもないとボクは思った。今でも不定期に再放送される伝説的なコント番組で多用されたオチのような結果になるはずだ。簡単に言うなれば、家庭崩壊。それはもう、まさしく舞台のセットがめちゃくちゃに倒壊するように。ずっとこけるしかない、あれだ。

さらに言うと、離婚が成立してママとみっちゃんが家を出てしまったら、パパは多額のローンを背負ったも同然だ。ママは必ず、慰謝料や養育費をパパに要求するだろう。

ママは情に流されない性格の人だ。ボクはずっと見てきたからわかる。他人に対して、もしくは信用できる人以外に対して、とてもドライだ。情け容赦は一切皆無。

ママとは対照的に、パパはとても情に流されやすい。少し前、涙を流してお金を借りにきたパパの親戚に、パパは家の貯金の半分近くを貸してしまった。ママがさんざん、「あの人に貸すのだけはや

めておいた方がいい」と忠告していたにもかかわらず。数週間後、その親戚は姿を消した。

今回のパパのしでかした浮気も、おそらくけど、情に訴えられる何かがあったのではないかと思う。まあ、それはその内、本人の口から語られることになるのだろっけねど。

結論から言えば、その予想は完璧に当たっていた。のちにパパが懺悔した内容が真実ならば、浮気相手の子の人生相談を受けている間に情が移ってしまったのだという。その子の辿ってきた人生があまりにも不遇で、かわいそうで、思わずその子を守ってやりたく慰めてやりたくなり、その果てに一線を越えてしまったと、パパは顔をしかめながら、それでも後悔はしていないというような口ぶりで語った。

「ママやみっちゃんへの愛情よりも、彼女への愛情の方が強いんだ」

パパはその日、最後にそう言った。

転落

パパの浮気を知ってから、一夜が明けた。

「ただいまー」「ただいま」

お昼過ぎに、ママは帰ってきた。みつちゃんも一緒だった。

「お、おかえり！」

ソファーから飛び上がるように、上ずった声で叫びつつ、パパは小走りで玄関に向かった。きわめて見慣れない姿だ。そんなことをすると――

「どしたの、パパ？　玄関まで出てくるなんて珍しい」

「さみしかったんじゃないの？」

案の定、勘の鋭い女性たちの疑問の声が聞こえる。「えっ、ああ、いや、あはは」とパパの笑ってごまかす声。

いつもながらに思うが、パパは不器用な人だ。よくもまあ、浮気になんて大それた真似をしたものだ。

ボクはあくびをして、眠気を飛ばす。

今後の身の振り方をどうするか。それが今のボクにとっての、最も重要な懸案事項だった。

パパの浮気をママに教えるか、教えないのか。教えるならば、決定的な証拠をつきつけるか、示唆にとどめるか。教えないならば、なにも知らぬ存ぜぬの姿勢で普通の犬のふりをつづけるか。

どの選択が、ボクにとって、家族のみんなにとって、最善なのか。

浮気が一過性ののであれば、なにもせずに見守っておくのがいいのかもしれない。誰にでもあやまちはある。不幸な事故だと思っ
てやり過ごせばいい。ママにとっても、知らぬが仏だ。

しかし、浮気が何年も続くようであれば、これはママにとって気の毒に過ぎる。浮気によって一番心に傷を負うのはママだ。だからこの場合、ママの気持ちを最優先に考慮したい。

それでも、ママが知らなければ良かったと思ったら、どうする。知らなければ問題は起きないし、問題は起きれば、いずれ何らかの形で解決をせまられる。

解決策は無数にあっても、そのどれもがみんなが不幸になる末路に繋がっている。不幸にならない末路に向かうためには、ママに何も知らせない選択をするしかない。結句、そこに行き着いてしまう。

自問自答を繰り返すが、まるで名案がひらめかない。水が雨になり川になり海になり雲になるように、思考がぐるぐると回り続ける。そうしていると、しだいに考えるのが嫌になってくる。どうしてボクがこんなことを考えねばならないのかと、いらだってくる。

けれども、飼われている立場にある以上、飼い主の動向を先んじて思案し、より良い方向へ導くように努めるのは、当然の義務と言えよう。古来より飼い犬の役割とはそうであったのだ。現在は愛玩

動物として扱われているが、昔は、飼い主の行く先にある危険を人より優れた嗅覚で事前に察知したり、飼い主のねぐらの前で番犬を務めたりと、常に人のために尽くしてきたのだ。

ボクはそんな祖先の犬たちを尊敬している。同時に、愛玩動物に成り下がった現代の犬たちを嫌っている。

ボクは後者のような犬には絶対になりたくない。だから、主人のため、飼い主のためにひたすら考える。

また、最悪パパとママが離婚したとき、ボクは一体どうなってしまっただろうという、漠然とした不安感が胸中にあつた。このところ連日ニュース番組で報道されていた、『捨て犬、捨て猫』などの社会問題が、その思いを強めていた。

——どうすれば、いいのか。

それから毎日、使えない頭を悩ませつつ、明日に怯えながら生活した。

ところがある日、思わぬところで事態は終結を迎えた。

パパの勤めていた会社が倒産したのだ。パパ本人が言うには、ブルが崩壊したあと、なんとか生き永らえていた会社であつたが、ついに耐えきれなくなった、とのことだった。

パパは職を失った。同時に、浮気相手に振られたことをボクにだけ話してくれた。こうして浮気の問題は、一応の解決を見た。

雨降って地固まるとはよく言ったもので、突然降りかかった不幸

により、家庭に変化が現れた。

ママとみつちゃんはパパを励ますようになり、パパはそれに応えるように求職活動に全力を注いでいた。冷えていた家庭に温かさが戻った。家族みんなが頻繁に笑顔を見せ合うようになった。

だが、パパの求職活動はうまくいかなかった。

やがて、貯金が底を尽きかけていることを、ママは家族のみんなに告げた。

「この家を売ろう」

そう決断した、パパ。うなずく、ママとみつちゃん。

ボクはこの日、パパの涙を見た。ボクが見た最初で最後の、パパの涙だった。

引越前日の晩。

ボクは、泣きじゃくるみつちゃんに抱きしめられていた。そして、こう宣言された。

「ポーチと一緒にいられなくなった」

ボクの背中に落ちる、みつちゃんの涙。

「親戚や知り合いに引き取ってもらおうとしたけど、だめだったの」
ボクの肩を温める、みつちゃんの吐息。

「保健所に行くと、誰かに引き取ってもらえることもあるけど、引き取ってくれる人がいなかったら、いつか……殺される」

火照り、湿り気を帯びた、みっちゃんの両腕。

「あたし、どうしたらいいかわかんない」

髪、首筋から漂う、みっちゃんの匂い。

「けど、保健所に行くぐらいだったら、野良犬として生きていく方がいいのかもしれない」

ときおり、しゃっくりのように嘔吐く、みっちゃんの喉。

「今のあたしじゃ、どうすることもできないけど、少しでも永く生きてほしいと思ってる。それはほんと」

何度もけいれんする、みっちゃんの胸。

「ごめん、ほんとに……ごめん」

……。

驚きはなかった。ボクは、いずれこうなることを予感していたのかもしれない。というか、家を売ろうとパパが言った時点で確信していた。

ボクが捨てられる原因は、みっちゃんのせいじゃない。かといって、パパのせいでも、ママのせいでも、もちろんない。

できごとの原因は、つきつめればきりが無い。すべての事象は、なるべくして、そうなってしまふ。

だから、自分のせいにしないでほしい。謝らないでほしい。泣かないでほしい。

そう伝えたい。意思を伝えたい。けれど、言葉にできない。

ごめん。ごめん。ごめん。ごめん。ごめん……。

みっちゃんの謝る声は、かすれて聞き取れなくなるまで続いた。

ボクはこのとき、自分が犬であることを呪った。生まれて初めて、その運命を呪った。

ひとりぼっちの雲

引っ越し、当日。

荷造りなどの準備を終えて昼食をとったあと、ボクは車の後部座席に乗せられた。家族みんなとのドライブ。

移動中、みっちゃんに首輪を外された瞬間、いよいよ別れのときが来たのだと、ボクは実感した。

車で走行すること数十分。まったく見知らぬ河川敷のそばで停車した。黙ってみんなが車から降りる。ボクは少しだけ遅れて、降りた。

紺碧の空に浮かぶ、大きな雲と小さな雲。ついさっき、車の中から見たときは、同じ雲だった。

「少し」

パパが川原を指差して、言った。

「みんなで歩こうか」

当たり前のことだが、川原は歩きづらい。足を踏みしめるたびに、足元に敷き詰められた石が不規則に回転して、ボクの体の重心を崩そうとする。

みんなも、ひざをひょこひょここと曲げながら、慣れない足取りで歩を進めていた。

ふとボクは思った。この状況は、まるでこれからボクらが歩いていく未来への道のりのようだ。

決してたやすく進める道ではないし、きっと、つらい。

早く平坦な道に行きたくて、急いで走ろうとしたら、転ぶかもしれない。転んだら、角張った石ころでけがをするかもしれない。そのまま立ち止まり、座りこんでしまいかもしれない。

——それでも、前に進んでいかなければならない。

黙ってひたすら先頭を歩くパパの背中が、そんな強い意思を物語っているようで、ボクはつい見とれていた。

不意に、立ち止まるパパ。ボクらをふり返り、頭を下げた。

「ごめん。今まで黙ってたけど、俺はある女性と浮気をしていた」

強い風が、穏やかな川の水面に波を立てた。石ころの間から生えている名も知らぬ草が、かすかに音を立てて、大きく体を揺らした。

ついに、このタイミングで、パパは自らのあやまちを暴露してしまった。いつかは白状するつもりでは予想していたけれど、まさかこの時機にとは思ってもよらなかった。

だって、今日から新たな一步を踏み出すんじゃないか。こんな大事なときに、突然足踏みするようなことを言い出すなんてありえないじゃないか。いったい何を考えているんだ。パパはおかしいよ！

ボクの頭はひどく混乱していた。が、ママの顔を見たその瞬間、時間が止まった。

「知ってたよ」

風がおさまると同時に、ママが答えた。ごく自然に、平然と。

「あたしがそんなの、気づかないわけじゃないじゃない」

そう言いきって、ママは口元に笑みを浮かべた。虚勢を張っている様子ではなさそうだった。自信に溢れる表情だった。

が、しかし、ママはふっと悲しげな顔になって、うつむいた。

「だったら私も言うわ。ごめん。あたしの方こそ謝らないとダメなことがあるの」

ママの顔が長い髪で隠れる。

「あたし、パパに黙って貯金おろしてたの。隠れて衝動買いしたり、高い店に行って友だちとランチ食べたりしてムダ遣いしてたの。それでもお金が足りないから、街金でお金を借りたり……してた」

「それは、本当なのか？」

「……うん。すごい高い利息で借りてた。けど、今は全部払い終えたよ。安心して」

ママは恥らうように舌を出した。パパの顔色は安堵の色に変わった。

しかし、それもつかの間、

「パパも、その浮気相手とは決着をつけてきたんでしょね？」

ママは表情を一転、頬を膨らませて上目遣いでパパにつめ寄る。

パパは、ファールをしてしまったサッカー選手のように手を挙げて、「もちろん」と回答した。

そのとき、くすくすと楽しげに笑い合う夫婦が、たしかにそこにいた。まるで数年前のような、仲睦まじいおしどりもどきだった頃の姿。

生暖かい風が、しきりにボクの頬をなでる。思わず、しつぽをぶんぶん揺らしてしまいそうになるが、ここは我慢だ。我慢。

「パパ、ママ」

と、みつちゃんが口を開いた。

「ごめんなさい。あたし、ほんと、何してもだめで、勉強も運動も何もできないから、パパとママがあたしのために小さいときから習いものいっぱいさせてくれたけど、全然続けられないし、そのせいでお金たくさん使っただろうし、苦労もかけただろうし……」

震えた声で言いながら涙を流し、言葉の途中で嗚咽がまじる。そんなみつちゃんの背中を、ママが正面からそっと抱きしめた。

「この子、どんなことをやっても一番になれない自分のために、いつもパパが頑張って稼いだお金が使われていくって、ずっと悪く思

つてたのよ」

ママは目に涙を溜めて言葉を続ける。

「パパ、あたしに相談してきたことがあったでしょ。『俺、とうとう嫌われたんだな』って。あのときはこの子に口止めされてたから言えなかったけど、本当は嫌ってたんじゃないのよ。負い目を感じてたの」

「……そ、それじゃあ——」

戸惑いをあらわにするパパに、ママは無言でうなずく。

そう。みっちゃんは部屋にこもって勉強をしていたのだ。パパの顔を見るたびに、勉強をしようという気分になるのだと、みっちゃんはこっそりボクに教えてくれていた。

ちなみに、みっちゃんが部屋で頻繁に電話していたのは、成績優秀な友人に勉強の指導を受けるためだった。でも、勉強よりも雑談の方が面白いから、笑い声の絶えない勉強会になってしまうのはしょうがないだろう。それに、いくら成績優秀とはいえ、小学生の指導力なんかたかが知れている。満足のいく成果を得られないものの、それでもみっちゃんは懸命に努力していた。毎晩のように。

また、ついでに真相を明かしておく、さっきのママの謝罪の言葉にはたくさんの偽りがある。ママは無駄遣いなんかしていない。再三言うが、そういう性格の人ではないのだ。とことんしっかりしていて、真面目で、その姿勢は絶対にして不変だ。

ならばどうして街金にお金を借りていたかという、みっちゃん

の習いごとを続けるための資金を補うためだった。

不況によりパパの収入が年々減る一方、みっちゃんの養育費はどんどん増すばかりだった。ママがパートをして収入を補うという手段は、パパが断じて共働きを禁じていたため、かなわなかった。だからママは、仕方なく、苦肉の策として、街金でお金を借りて、その場をしのいでいたのだ。

しかし、それでもお金が足りなくなったので、ママは空いた時間を探して、パパやみっちゃんに隠れてパートを始めた。家庭が冷め始めたのも、ちょうどその頃合だ。ママは当時、いつも疲れていた。

みんな、隠しごとをしながら、生きている。偽りの自分を演じて、誰かのためにと、苦心している。

けれど、演じているうちに、ある日途方もないストレスを覚えてしまう。

「どうしてみんな、わかってくれないのだろう」

嘘をついていることに慣れて、嘘をついていることを忘れてしまい、誰もわからないように自分がふるまっていたことすらも忘れてしまう。誰もわかってくれないのが当たり前なのに、誰もわかってくれないことを嘆く。

こうして心の闇はつのっていく。いとおしく思っていた人を、嫌になる。それがたとえ、家族であれ、誰であれ。いつしか互いに、心が離れていく。

そう考えると、パパが失職していなくとも、いずれ別の形でこの

家庭は崩壊していたのかもしれない。それはもう散々な結末だろう。家族の絆を結びつけるのは、お金でもお家でも血でもなく、それぞれの心なのだから。

だから、よかったんだよ。これで。

——ボクは全力で駆けた。まるで転ぶ気はしなかった。

「ポーチ！」

遠くでパパの叫ぶ声が聞こえる。でも、ボクは振り返らない。

ボクは心では、みんなのことを家族だと思っている。思い続けていく自信がある。だから、いいんだ。

「ポーチ！」

もつと遠くでママの甲高い声が聞こえる。でも、ボクは前に進む。

みんな、家族の幸せのことを考えて、偽りの自分を演じていたんだ。ボクも、演じなきゃいけないだろ。

「ポーチ！」

もつともつと遠くでみっちゃんのしわ枯れた声が聞こえる。でも、ボクは止まらない。

ここで演じなきゃ、飼い主のために尽くさなきゃ、飼い犬失格だ。

あと、最後にボクは彼らに贈り物をしておいたんだ。後々、車内

は大パニックになることだろう。ボクに怒り心頭のことだろう。

なんてったって、車から降りる前に、大きい方でマーキングをしてやったんだから。

彼らの心にも、ボクがいたんだという証拠を永遠に刻んでやった。そしてこれからは、ウンに恵まれるようにと願をかけてやった。

……ああ、そうだ。

もしかしたら、この出来事によって、今さらながらボクが人の言葉のわかる天才犬だということに、彼らは気がつくかもしれないな。手放しちゃって惜しいことをしたな、と後悔するかもしれないな。その方が余計に忘れられなくて、いいね。うんうん。

——パパ、ママ、みっちゃん。それじゃあ、さようなら。もう会うこともないだろうけど、お元気で。ずっと、笑っていてください。

上を向くと、ひとりぼっちの雲が、微笑んでいるように見えた。

雲の色

かすかな明かりに照らされた透明の水滴が視界の下に消えていく。ぽつりぽつりと単調な音を刻んで。

その背景には、途切れることのない雨。

昨晚からずっと雨が降っていた。みつちゃんたちと別れて、二ヶ月ほどが経過した頃だった。正確な日時は覚えていない。もう何日もテレビやラジオの音を聞いていないから。

今のボクの脳内を支配しているのは食欲だった。いまだかつてないくらい、お腹がすいていた。ときおり、腹部に小さな疼痛を覚えた。

決まった時間、決まった場所に食事が出てくる、そんな当たり前の日常が恋しい。人目を忍んで不潔な路地裏を歩き回っては、青いポリバケツや黒いゴミ袋を見つけるたびに喜んでしまう、そんな自分が悲しい。

ボクの心は飢えていた……いや、あるいは乾いていたという表現が適切かもしれない。まるで雨の降らない土地のように、何の希望の芽も生まれず、茫洋とした砂地が広がっているような心境だった。砂地の他には、過去という逃げ水だけがそこに存在していて——当然、逃げ水に近寄っても、そこに本当の水はない。

最後に、ボクに水を与えてくれる人がいた。

食べかけのパン。砂のついたおにぎり。ばらばらのクッキー。

公園の木陰で寝そべっているボクを見て、彼らは一様に「かわいそうに」と呟き、手持ちの食料をくれた。

だが、そんなのは結局、彼らの独りよがりな自己満足だ。同情なんかされても、ボクの心はなんら潤わない。三日も経てば彼らの顔なんか遠い過去の記憶となる。

けれども、少しでも彼らに頼らざるを得ない状況が、ある。二日前も、あの橋の下で酔っ払いのおじさんに出会っていなければ、ボクはどうにかなっていたかもしれない。

ふと思った。

ボクは、彼らに感謝するべきなのだろうか、と。何も頼んでいないが、彼らの独善によって、ボクは生かされている。

この疑問は、以前テレビのドキュメンタリー番組で見た、とある女の子の疑問に似ている。

——親が勝手に私を生んだだけで、育ててるだけで、私は「生んでくれ、育ててくれ」なんて頼んでいない。なのにどうして親に感謝しなくちゃいけないの？

たしかこの疑問は、放送時間内に解決されなかった。複数の大人がうやむやな回答をして、正鵠を射るような答えは出なかったはずだ。

あのとき、ボクもその答えがわからなかった。そして、今もわからない。

……というか、そんなこと、どうでもいいや。

ボクはすぐに考えることを放棄した。

考えても腹が満たされるわけじゃない。当面ここから移動できそうにないし、しばしのあいだ眠ろう。眠れば少しは空腹の苦しみが解放されるだろう。

水の滴がボクの頭上にある木の板のふちにしがみついていた。長い時間、ずっとずっとしがみついて——やがて落ちた。

ボクは、滴が地面に当たって弾けた瞬間に、目を閉じた。

出会い

翌朝、朝焼けに照らされてボクは目覚めた。圧倒的な光の量に、眼球の奥に痛みを感じた。泥沼に沈んでしまったかのような倦怠感が身を包んでいる。

目を開けるのがつらい。起き上がるのがつらい。呼吸すら面倒だ。もうひと眠りしよう——そう思案したところで、腹部に激痛が襲った。

とうとう空腹が限界を迎えてしまったみたいだ。しかし、食料を求めてそこらをさまようほどの気力もない。

このままボクは死ぬのだろうか。

そんな思いが頭をよぎったときだった。

「おい」

低く、しわがれた声がした。同時、目の前から太陽が消えて、逆光を背にした大きな人影が現れた。

目を凝らして見やると、そこには老婆が立ちはだかっていた。乱れた白髪、つり上がった目、激流の川のようなしわだらけの顔面。

ボクは、今が朝でよかったと思った。夜に見たら、きっと失神していたから。

「おい、私の庭で何をしてんだ」

と、老婆は鬼のような形相で言った。

ボクは石造のように硬直していた。朝だろうが夜だろうが、やっぱり怖いものは怖い。

こう着状態がしばらく続いて、老婆は、動かないボクに大きく舌打ちをして、

「……この、くそ犬が！」

そうはき捨てて、どこかに去っていった。

老婆の姿が見えなくなり、ようやく動けるようになったボクは、一目散にこの場から離れた。

これが、今の飼い主との初めての出会いだった。

床下の犬

目下、問題だった食料探し。

たったの数十分ほど歩き回ったところで、目的はあっさりと達成できた。またさらに運のいいことに、大音量でテレビを流す家の床下に潜りこむことにも成功した。

今日発見したゴミ捨て場は穴場だった。これから何度もお世話になることだろう。

しかし、同じ場所を何度も荒らすと、そこに厳格なゴミ捨てルールが生まれ、食料調達が困難になるので、複数の場所をローテーションして、各所に気を配らなければならない。

たかが食料を得るために、これだけの苦労。贅沢な家庭で育った家犬だった頃には想像もしていなかった。

でも、なんとか生きている。ひとりでも生きていける。

そんな自負が、確固たるものになりつつある。決して満たされていないとは言えないが、自立の達成感にちよっぴり喜んでみたりもしている。

『——それでは、スタジオにお越しいただきました、超能力の使い手の登場です！』

朝からどんな番組をしているんだ。ボクは苦笑した。

最近のニュース番組のバラエティ化にはあまり感心しない。もちろん朝から暗いニュースばかりを報道されるのはきついけど、それにしたつてもっと爽やかなコンテンツのものを視聴したい。

音楽が流れてしばらく経つと、驚きの声その節々に入るようになった。が、当然のことながら映像が見えないので、何をやっているのかボクにはわからない。実況もないので、イメージすらわからない。

以前は大好きだったテレビも、最近はめつきりつまらなくなった。

原因はわかっている。映像が見えないからつまらないのだ。けれどボクは今、ただの野犬だ。テレビを見られるような身分じゃない。

ゆいいつ、トーク番組だけが救いだった。この番組だけは全神経を耳に集中させて一言一句漏らさずに聴いた。

でも、それもだんだん面白くなってきた。それはついこの間、誰かをけなして笑いを誘う手法に、嫌悪感を覚えたのがきっかけだった。

貧乏をテーマにした内容だったように思う。とある三十代の女優がこう語っていた。

—— 若い頃、いつも高級車に乗ってデートの迎えに来る彼氏がいたのだが、一度も彼氏の家に招かれたことがなかった。何か後ろめたいことでもあるのかと勘ぐった女優は、ある日、デートの帰りに家まで送ってもらいその場で別れたあと、急いで自分の車に乗り込み、彼氏の車を追った。そして、数十分以上の追跡を続けて、ついに彼氏の車が駐車場に止まった。その場所はなんと、ボロボロのア

パートの駐車場だった。それから女優は、彼氏からどんなに高級なプレゼントをもらっても、ぼろぼろのアパートが頭に浮かんだと言う。さらに彼女は、

「彼氏が悪いことをしてプレゼントを手に入れてきているのではないかと邪推するようになった」

と笑いながら言った。

家犬だった当時のボクなら楽しめた内容だったのだろう。

しかし、現在は違う。ひたすらに怒りの感情だけが込み上げてきた。公衆の面前で、なんて低俗でくだらない話をするのだと真剣に思ったし、その話を聴いて笑っているギャラリーにも無性に腹が立った。

その後、番組放映中に頻出した言葉——はげ、でぶ、あほ、くさい、ぶさいく、びんぼう——これらの言葉は、なんと不必要なものだろうか。

他人の劣等感を題材にして笑いを取ろうとする趣味の悪さに、ボクは嫌気がさした。笑えない冗句だ、と。何の知性も感じない、と。

今、冷静になって、あのとき感じた怒りの原因を考えると、あるふたつの事柄が思い浮かんだ。ひとつは、『貧乏』という言葉に対して、パパやママやみっちゃん顔の顔を想起してしまったから。もうひとつは、小汚い姿で貧しい生活をする自分自身のことを言われているような気がしてしまったから。

ボクは、笑いは正義だと思っていた。笑う人も、笑われる人も、

笑わせる人も、その誰もが誰かの心を穏やかにさせるためになつていて、みんなが幸せになれると信じていた。

しかし、それは間違いだった。

笑う側から、あるいは笑わせる側から、笑われる側へ立場が変わるだけで、途端につまらなくなり、悲しくなるものなのだ。笑われて得をするのは、テレビの中の人たちだけだ。彼らは笑われることが金になる。お笑いというのはそんなもんだ。

『——このマジックはね、見る角度によってタネがばれちゃうんだよね。実に簡単な原理なんだ。今からテレビのみんなにだけ、このマジックのタネを教えるから、よく見ててね。頑張って練習してみようね』

抑揚のつけかたの巧みな声が聞こえた——と思いきや、唐突に、CMでおなじみの歌が流れ始めた。

さて、移動するか。

ボクは心の中でそう呟いた。テレビは面白くないし、これ以上ここにとどまる理由はない。歌がサビの途中で終わったのを合図に、ボクは身をかめた状態のまま地面をはえずり、家の床下から脱出した。

オアシス

猛烈な陽射しと、雨上がり特有の蒸し暑さが、ボクの不快指数をどんどん高めていく。食欲は満たされたけれど、気分は最悪だ。ボクは舌をだらりと出しながら、近くの川に向かった。一刻も早く、水分の補給と、身体の洗浄がしたかったから。

しかし、いざ目的地に到着して、ボクは愕然とした。いつもは穏やかな速度で良質な水が流れていた川が、土色の水を怒り狂ったような勢いで流していたのだった。

連日、大雨が降っていたことをすっかり失念していた。まったく程度の低いミスだ。少し考えれば予想できたはずなのに。ちくしゅ。

なんとも愚かな自分に悪態をつきつつ、川原のくぼみに溜まっていた水で喉をうるおした。ついでに、足の裏を洗っておく。調子に乗ってじゃぶじゃぶと足踏みしていると、しだいに水が茶色に染まっていった。これも、愚かな失態だった——ので、他の水溜りを探してふたたび足の裏をそそぐことになった。

来た道に戻って数分が経った頃には、また喉が渴いていた。もつと飲んでおけばよかったと後悔した。

ふと通りがかったところに小さな公園があった。人は誰もいないようだ。遊具はブランコだけ——じゃなかった。幸運なことに、水飲み場があった。縦長のお墓みたいな石から、銀色の蛇口が飛び出ている。

ボクは急いで駆け寄って、前足で蛇口の栓をひねろうとした。だが、まるで動かない。かなりの力を込めたが、栓はとても固く、びくともしない。

でもっ！　なんとかっ！　爪を！　引っかければ――回った！

その次の瞬間、蛇口から大量の水が流れ始めた。ボクは慌てて水に舌を当てる。

ごくろり、ごくろり。うまい。とても生き返る。身体に染みわたる。

清涼飲料水の宣伝文句のようなことを考えながら、ごくろり、ごくろり、ごくろり、ごくろり……と、その途中、ボクは飲むのを中断した。

「ゲホッ」

思わず大きなげっぷが口から漏れた。勢いあまって飲みすぎたようだ。腹部に微かな圧迫感を覚えるほどに。

お腹の中で水が揺れるのを感じながら、ボクは木陰に場所を移し、寝転んだ。ここは風当たりもいいし、人も来ないし、地面は草だし、最高の場所だ。

これでテレビもあれば、何も文句は言うまい、なんて、高望みしすぎかな。

そう思ったとき、ふっと身体が軽くなったように感じた。久しく感じていなかった気分だったが、それが安心感だと気づくのに、それほど時間は要らなかった。

まぶたを閉じると、さらにいつそうの安心感を覚えた。頭の意識だけを残して、全身の感覚がなくなっていく。

こんな時間が続けばいいのにな。

そうして、ボクの意識は遠ざかっていった。

寝起き、最悪

「おい、こんなところに犬がいるぞ」「わっ、ほんとだ」

突然ふたつの声が聞こえた。

「お前、触ってみろって」「嫌だよ。かまれるかもしれないし」「びびってんなよ。じゃあ、俺が触ってみるわ」「……かまれんなよ」「寝てるから大丈夫だって……ほらっ！」

人の手でなでられているような感覚が、わき腹と背中を行き交う。

「触れるぞ」「あれ？もしかして死んでる？」「ばーか。息してるよ。この腹、見てみな。動いてるでしょ」「……うん。それにしても触りすぎじゃないの？」「犬はな、こうしてなでられるのが好きなんだよ」「さつきからまぶたがぴくぴくしてるけど」「え？あつ、ほんとだ」「それ、怒ってるんじゃないの？」「そ、そうかも」

そうかも、ではなく、まさしくそうなのだ。安眠の邪魔だ。しかし、さつきから続いている不愉快な感覚は、まだ消えない。

ならば、この怒りをもつとわかりやすく伝えるために、のどを鳴らしてやるか——とボクは考え、即座に実行してみた。ぐるるる。

すると、「逃げろ！」「ああつ！置いてくな！」と効果てきめん。薄目で様子をつかがうと、二人の少年が公園から走り去っていく姿が見えた。

ボクは内心ほつとした。彼らが気弱な性格でよかった。無駄ないざごさはごめんだ。ボクはただ平和に暮らしていただけなのだから。

それにしても、ずいぶん深い眠りについてしまっていたようだ。まだ意識がはつきりしない。まぶたを閉じれば、すぐにでも二度寝のできる状態にある。

小さな脅威も去ったことだし、たまには満足の行くまで惰眠をむさぼるのも悪くないかな。

そう思ったときだった。遠くで数人の子どもが騒いでいるような声が聞こえた。もしや、さっきの少年たちが戻ってきたのだろうか。誰かを引き連れて。

ボクは、少年たちが現れたら、すぐにでも避難できるよう立ち上がった。

予想通り、公園の出入口に少年たちがやってきた。やはり少年たちだけではなかった。少年たちにはさまれる格好で、背の高い男性がいた。

「あれ!」「そう、あの犬だよ!」言いながら、少年たちはボクを指さした。「早く退治しちゃってよ!」「そうだよ、ぼくたちなにもしてないのかまれそうになったし!」

「待て、お前ら」

男性はびしりとそう言い放ち、少年たちの前で手を広げた。同時に、少年たちは立ち止まり、口を閉じた。

「お前らは、ここで待つてろよ。もし騒いだら、あの犬が興奮して暴れるかもしれない。いいか？」

ボクがぎりぎり聞き取れるくらいの小さな声で、男性は少年たちに指示をした。少年たちはこくりとうなずく。

ボクは彼らの動きを観察しながら、彼らがどういう行動に出るのか、推測していた。まず間違いなく、彼らはボクに対して敵意を抱いている。暴力的な手段をもって、ボクは取り押さえられる可能性がある。

ひとりぼっちになってから、ボクは何度も人に追いかけられた。首輪をしていない犬は、人の世界で言うところの不審者や犯罪者と同じ扱いで、そこらをただ歩いているだけで危険とみなされ、通行人によって警察や保健所に通報されることがある。ずっと昔、ボクはその事実をテレビで知った。だからなるべく人に遭遇しないようにと心がけてはいたものの、人のいない土地に恵まれた条件の（食住の都合がいい）土地があるはずもなく、生きていくためにはどうしても人に遭わなくてはならなかったのだ。

おそらく、目の前にいるこの男性は、ボクを捕獲して保健所につきだすつもりでいるのだろう。なぜなら、以前に出会った警察や保健所の連中と、まったく同じ目の色をしているから。

しかし、男性の思惑通りにはさせない。ボクは絶対に逃げる。逃げてみせる。先日、捕獲のスペシャリストたちから逃げきったときと同じように。

気を抜かず、それでいて気負いもせず、ボクは身構えた。男性が

次の行動を起こしたときが、戦いの始まりだ。

この公園は、複数の民家の塀に囲まれるようにして存在しているので、出入口は一方方向しかない。公園の見取り図を文字で表すなら、「コ」の形状になる。開いた部分が出入口だ。ボクは出入口から向かって右奥にいる。

男性は、半身になってじりじりとすり足で近づいてくる。どうやらボクをコーナーに追い込んで捕まえる気らしい。しかし、その方法はボクには通用しない。複数人ではさみうちにされれば、さすがのボクも逃げるのは困難になるが、相手は一人だ。出入口にいる少年たちは、どうせつつ立っているだけで何もしないだろう。

右に走るか、左に走るか、それともフェイントをかけて揺さぶってみるか。男性との距離が五メートルくらいになったら、アクションをしかけてみよう。

まるでサッカーのオフENSEの選手になった気分だ。今のボクは、男性を抜き去ることだけを考えている。

男性が歩調を変えた。半歩ずつ距離を縮めてくるようになった。それでも、男性の顔からは油断や焦りの色は見えない。

男性との距離が――ハメートル、七メートル、六メートルのところで、男性は思わぬ行動に出た。足下の砂をつかみ、ボクをめがけて投げつけてきたのだ。

その行動があまりに唐突だったので、ボクは面食らってしまった。不幸中の幸い、目をつぶされなかったものの、逃げるタイミングを失った。

男性との距離は、およそ三メートル。男性を間近で見て、ボクは少したじろいだ。この男性、体型は一般のそれだが、かなりの上背がある。威圧感が尋常じゃない。

しかしだ。

ボクは後ろ足に全体重を乗せて、一気に右方向へ駆け出した。その瞬間、男性が爆発的な動作で身体を前へ傾けて左手を伸ばしてきた――が、その手は空を切った。そこは、すでにボクが通り過ぎたところだった。

しょせんは、ボクの敵では、ない。

「あつ」「あつ」と少年たちの声が重なった。続けて、砂の地面を強く踏ん張るような音が聞こえた。

ボクはトップスピードに乗ったまま公園の出入口を通り過ぎ、硬く上がったコンクリートの上を無我夢中で走った。

これで通算、五度目のウィニングランになった。

元・家犬の苦悩

数分後、地面を這うようにして、ボクはのろのろと移動していた。

全力を出したあとの反動に、いつも苦しむ。というのも、だらけた家犬の生活を何年もやってきたからだ。運動不足ここに極まれりといった具合だ。

ボクはそこそこ永い時間を生きてきた。肉体的な全盛期は、数年前に終わりを迎えている。ゆえに年々、運動能力が低下していることも自覚している。現時点で自分の寿命を予想することはできないが、いつ、何があってもおかしくないとは思っている。

今後どのように余生を過ごすか。

最近ではそればかりを考えてきた。いつその町を出て安住の地を求めて歩こうか。それとも、この町にとどまり、怖い怖い人の影にびくびくとおびえながら生きていくか。

何か大きなことをする余力は、もうそれほど残っていない。町を出るならすぐにでも動かなくちゃだめだろう。

しかし、現状は『今』を生きることがやっとだ。まさしく『今』も、今日三度目の水分補給をするべく、路地裏をさまよっている。

いくつかの公園を回ったが、すべて子どもがいた。また、襲われる可能性を考えると、うかつに公園に足を踏み入れられない。

人のいなくなる夜になるまで、ひたすら我慢しながら待つしかない。

いのか。いや、それまでに涸れてしまいかもしれない。

町を出ることにしてもそうだ。秋になるまで、町を出ることは諦めなければならぬのか。いや、はたしてそれまで生き延びられるのか、ボクは。

頭上を旋回し続ける、ひとり問答。考えるのが嫌になるまで、ぐるぐるぐるぐる、自問自答——どうする、こうする、しかし、そうだ、いや、こうだ、ちがう、あれだ、わからない。

……何度、同じ思考の道筋を辿っただろう。いつしか視界は藍色に染まった風景を映し出していた。

ちくりと、針で刺したような痛みがのどを襲った。しかし、もう我慢しなくていいんだと思うと、やがて痛みは治まった。

そろそろ公園に行っても安全な時間帯だ。公園に行けば、今朝のようになくさん水が飲める。

ボクは狭い路地から出て、ここからいちばん近い公園に向かった。

到着するや、蛇口をひねり、すぐに水を飲んだ。

喉の渇きに耐えた分だけ、おいしい水が飲める。

『苦勞した分だけ、対価を得られる』

これは最近知った事実だった。

ボクは生まれてこの方、何も苦勞なく、恵まれた生活を送ってきた。

た。だから今、恵まれていた頃分だけ、こうして苦労しているの
だろうか。……ボクが何不自由なく生活してきた年月は七年以上だ。
もし、その考えが正しいとするならば、ボクはこの先死ぬまで苦労
し続けることになるのではないだろうか。

ボクは水を飲むのをやめた。

ぐつと胃が重く感じるのは水を飲みすぎたせいか。それとも絶望
的な未来を予想してしまったせいか。

……いや、余計なことを考えるのも、やめよう。

とりあえず、この夏を乗り切ろう。それから改めて考えればいい。

自分にそう言い聞かせ、公園を後にした。

言の葉

——とりあえず、この夏さえ乗り切れれば。

つらくなつたとき、何度もこの言葉を心の中で唱えた。

しかし、その行動は何ら意味をなさなかった。

山にびつしりと重なる無数の木の葉は、一見、ボクらの目に美しく映る。だが、どうだろう。その無数の木の葉も、いつかは地面に落ちて、土と同化し、誰からも見向きもされなくなる。

言の葉も同じ。

心に美しい言葉を無数並べてようと、時が経てばいつかはすべて忘却の地に落ちる。見向きもされなくなる。

願いは、いくら言葉にしても無意味だ。願いは、自らの手足を動かして叶えるものだ。

たった三日間。

あれから三日しか、ボクは我慢できなかった。たまらず市街地から逃げ出した。

その日はとても風が強く、周囲の木々がしきりにざわついていた。蝉のけたたましい合唱も気にならないくらい、ざわついていた。

ボクは雑木林に迷い込んでいた。人の気のない道が無心で辿った

末、行き着いた先が雑木林だった。

たくさんの人がいる土地はもうこりこりだった。あんな危険の多いところでは、とてもじゃないが、安心しながら生きていけない。

実のところ、雑木林なる地はテレビでしか見たことがなかった。

初めて足を踏み入れてまず思ったのは、傾斜やでこぼこの地面が非常に歩きづらいということだ。歩き始めてからたったの数分で、地面のくぼみや木の根っこに足をひっつけた回数はどうに五回を超えている。

だが、真上から太陽の光を浴びつつ、熱々のコンクリートの上を歩いていたときのことを考えると、こちらの方が圧倒的に、肉体的、精神的負担は少ない。

雑木林はその名の通り、おびただしい数の木々が、天に向かって背比べをしている。木々の下は、ほとんど陽が当たらないため、ひんやり涼しい。

新鮮な風景、新鮮な空気、新鮮な匂い。どれをとっても、今まで暮らしていた土地よりも居心地がよい。

ここはボクの願いに一番近い場所。残るは、食料と飲み水の在り処さえわかれば、すべての願いが叶う。

湧き上がる期待を胸に、ボクはひたすら足を動かした。

溺死寸前

.....。

少し時間が経って。

げぼげほとむせながら、ボクは陸に打ち上げられていた。

今までの水遊びで培った経験上、水中では、底を軽く蹴っただけでも身体が浮き上がるものだとか高をくくっていたのだが、気づけば溺れかけて死にかけていた。

まさか水底があんなに軟らかいものだとは思ってもよらなかった。

足の裏にぬるっとした感触が伝わったとき、ボクは本気で死期を悟った。

だが、何とか生き延びることができた。意識が飛びかけていたので、どうやって陸まで上がったのかは不明だが。

守銭奴が大量の金貨に埋もれて圧死するように。

求めてやまなかったものによって殺される、なんてありふれたブラックジョークは、聞き及ぶことはあっても当事者になるものではない。

だけど。

死に直面して、怖い目にあって、それでも腹の底からおかしさが

こみ上げてくるのはなぜだろうか。

愉快だ。なぜか、とても愉快だ。

つらくて、しんどくて。今にも逃げたくて、死にそうで。

そんな自分がどうしてか、我のことながら愉快だ。笑ってしまう。

不幸な人を笑えるのは、不幸じゃない人だけ。また、当事者は、その不幸を笑えない。

前に、そう思った。だが、どうやらそれは間違った固定観念だったようだ。

ボクは起き上がり、頭と肩を左右に強くねじって体毛に残った水を吹き飛ばした。

不幸な体験ができる幸運な自分。

こう考えれば、今の自分も悪くない。

水に飛び込んで、ようやく何か気持ちいが吹っ切れた。さて。このまま、次の目標に向かって突き進もう。

狩猟

次の目標は、食糧探し。

まずは、この雑木林にどんな動物がいるのか、知っておく必要がありそうだ。

その中から食べられそうな動物を捕獲して、食べる。これが野生で生き抜くためのひとつの手段だろう。

だが、生まれてこの方一度も狩猟の経験を持たないボクが、そう簡単に野生の動物を捕まえられるとは到底思えない。

だから、ここでは嗅覚を使って、死骸を探すことに専念しようと考えている。今まではあまり使いどころのなかった鼻だけれど、今では最も頼りにしている。

再び雑木林の中に入って、鼻をくんくん、歩き回る。

気がつけばずいぶん日が傾いてきた。しだいに視界が暗くなってきた。長身の木々が上から降りそそぐ光を遮っていることも手伝って、平地よりもそのスピードは早い。

しかし、すぐに慣れる。ボクは夜目が利くのだ。したがって、それほど食糧探しに支障はない。とは言っても、昼間と夜では場の雰囲気さがらりと一変するので、正直不安だ。

初めての雑木林の夜。何が起こるかわからない。つい油断して、危険な事態に陥るようなことは避けたい。なるべく早急に空腹を満

たして、次の目標段階に入りたい。食事の後は、寝床の確保だ。寝床はもちろん、安全そうな場所がいい。それ以上は望まない。

進む先々に現れる黒い立木をかわし、また現れる黒い立木をかわし、木の根や倒木に足を打ちつけ、小さな穴に体勢を崩される。変化の乏しい地面を眺めて——ときおり目につくものは、ボクの頭くらいある腐りかけた木の破片。

地面の香り。草木の香り。それら以外の香りはない。

鼻に羽虫がぶつかる。耳や目の中に入ってくることもある。が、いちいち気にしてはいられない。

異臭を感じることに集中する。動物の死臭。悪臭。ほんのささいな臭気も逃さない。

いきなりだった。

「カアー、カアー——と、甲高い声。遠くから、カラスの声がした。ボクは、耳をすます。どうやら複数のカラスの声だ。ばさばさと羽ばたく音もする。

ボクは、はっと回想した。町で見かけたカラスたちのよく集まる場所を。なるほど、もしや……。

危険は承知の上で、声のする方に近づいてみる。そこに何があるのか、確かめたい。

小枝や障害物で音を発しないよう、下を注意深く気にしながら前進する。

その瞬間だった。さびた鉄のような臭いと、腐った生肉のような臭いを感じた。どうやらビンゴのようだ。

木の陰から片目で様子をうかがうと、いくつかの黒い影が塊となつてうごめいていた。

やはり、中心に——ボクの欲するものがあるようだ。

そう確信したら、胃袋が活発に動き出した。

あの影の塊に突進して、中心にあるものを奪い去ろうか——なんて、まるでハイエナのような考えが頭に浮かび上がる。

あまり、いい気はしない。しかし、食糧を手に入れる方法に気持ちはいらぬ。奪うか奪われるか。食うか食われるか。弱肉強食。これが自然界の正義。

もうボクは、人間の考えが正義だとは思わない。道德、倫理……知るものか。お手、お座り……もう忘れた。

空腹を満たす。欲求を満たす。生存本能の赴くままに、どんな無茶でもやってやる。

獲物を奪って、逃げる。逃げ足には、自信がある。あとは……心と理性。これが問題だ。

理性は心身の重心となる。心身を安定させる役割を持つ。しかし同時に、動作が鈍る。それはどういふことかという、意識的、あるいは無意識的に、ひとつひとつの挙動に躊躇が生まれる。

野性の生き物と戦う場合、躊躇は禁物だ。野生の生き物には躊躇がないので、常に全力で立ち向かってくる。そこに一切の油断はない。

だから、こちらも理性を棄てて、全力で立ち向かうしかない。そうしないと死ぬかもしれない。死んだら終わりだ。当たり前だが。

頭上の木の葉が、にわかに騒ぎ出す。

覚悟は決まった。いざ、やってやろう――。

捕獲

ボクは四足の力を抜いて関節を曲げ、地面を蹴った。無我夢中で、黒い影の塊に突進する。

黒い影の塊は、木の陰から飛び出したボクの存在に気づいたのか、わっと大きくなって、たちまち複数のカラスのシルエットに分裂した。そして、ばさばさと羽の音を立てて四方に散っていった。

黒い影の塊がいた場所の中央には、案の定、やや大きめのねずみが横たわっていた。全身血まみれで、ぴくりともしない——と、悠長に観察している暇はない。すぐに逃げよう。

ボクはねずみを口で拾い上げ、ここまでやってきた道を全速力で引き返した。

逃げている途中、何度もねずみを落としてしまった。その度に背後を振り返り、ずっと向こうの暗闇を見て、臓器を冷やした。

相当、遠くまできた。ここがどこかわからないくらいに、遠くだ。また、あの池を発見するまでに、どれだけの時間がかかるのだろうか。考えただけで憂鬱になる。

だが、嬉しいこともあった。

それは初めての挑戦に初めて成功したことだ。

ボクは口にくわえていたものを地面に降ろした。初めて捕獲（横取り）した食糧だ。

——それでは早速、賞味しよう。

ボクは肉に歯を立てた。強い弾力を感じた後に、硬いものにぶつかった。骨だ。ボクの好物の、骨。長い時間をかけて、かみ尽くそう。

ところで味はというと、けもの独特の風味がする。ときおり、錆びた鉄のような味が口の中いっぱい広がる。

美味だ。空腹のせいもあってか、極上の逸品に思えてしまう。また、すでにカラスに身体の大部分をつつかれてしまっていて、残っている肉がほんの少量だったので、その貴重さも味の評価に加点されている。

満腹とは言えないが、空腹はやわらいだ。今夜は寝つきが良さそうだ。

ふと、視界を回転。

思えば一日中この山を走り回ったが、ついにボクが獲って食われてしまいそうな動物に出会うことはなかった。

もしかしたらこの山は意外と安全なところなのかもしれない。まだ、このうつそうとした雰囲気には慣れないが、そろそろ少し警戒心を緩めてもいいだろう。

いきなり、あくびが込み上げてきた。身体は正直だ。安心したらすぐこれだ。口を大きく開くと、あごの筋肉がだるくなっていた。

今日は歯を食いしばる場面が多かったからだ——と、改めて今日
一日の記憶を振り返ると、どっと疲労が全身に押し寄せてきた。

ここで休むか。

ボクは右半身を地面につけて、手足を丸めて身体で半円を作った。

明日はもっとたくさん食糧を集めよう。

そう決心して、まぶたをそっと閉じた——そのときだった。

へびに睨まれたカエル

声が、聞こえた。

鳴き声だ。複数の鳴き声。さっきのカラスとは違う声。

いかくするような、不規則で、低音の音が、しだいに、こちらに迫ってくる。気がするだけ？ いや、そうじゃない。一陣の風のように、木をよけ、草花を揺らし、何かがこちらに向かってくる。

鳴き声に、足音がまじる。

ボクはすぐさま、その場から逃げ出した。しばらく停止にするはずだった警戒心が、一瞬にして真っ赤に染まった。突然の事態に、背筋が凍りつく。

とにかく逃げろ。逃げろ。逃げろ。

得体の知れぬ殺気が、周囲に充満している。これは理屈じゃ語れない。本能だけが敏感に察知するもの。自分にしかわからない。いつか、いくつか体験した人の殺気なんて、全然大したものじゃない。生ぬるい。

人間の彼らには殺気とは別の感情があった。恐怖。焦燥。緊張。このような負の感情を抱いている相手には、勝機がある。勝ち、と言っても、逃げるが勝ち、だが。

一方、今回の相手は負の感情を持っていない。もし負の感情を持っていたら、彼らは即座に逃げているはずだ。人間以外の野生の生

き物とは得てしてそういうものだ。

——ボクは以前に一度。たった一度だけ、野生の生き物の戦いを間近で見たことがある。

あれは、まだ飼い犬だった頃のことだ。何を思い立ったか、そのときのボクは家出をしたのだ。町中を歩き回った末、だだっぴろい草むらに辿り着いて、そこでしばらく時間を潰していた。

草むらをかき分け進むと、小川があつた。幅、二メートルくらいの川。

その川岸に一匹のヘビがいた。好奇心が旺盛だったボクは、くねくねと移動するヘビを追いかけた。

ヘビのゆく先に、カエルがいた。両頬をひくひくと動かしつつ、独特の音色で鳴いていた。そこにヘビが接近するや、カエルは急に大ジャンプを見せた。が、ヘビはカエルの着地点を予測していたような動きで——捕食した。

その光景を目の当たりにしたボクは恐怖に震えた。そして次の瞬間、いても立つてもいられず、無我夢中でヘビに襲いかかった。でなければ、次はボクがヘビに食べられてしまうと思ったからだ。もちろん、そんなことはないのだが。

ヘビはボクの姿に気づくと、カエルを追いかけていたときよりも速くどこかに隠れてしまった。

こうしてあっけなく、ボクのとっさの行動は杞憂に終わった。

今思えば、なんと昔のボクは間抜けだったのだろうと顔が熱くなる。

だけど、この体験によってボクは思い知った。野生の生き物が自ら闘いを挑むのは、勝てると思込んだときと、殺されそうになったときだけだということを。

——あのとき感じたものは、今も色褪せることなく心に残っている。今のボクの立場は、あのときのカエルと同じだ。逃げる側。逃げられなければ捕食されてしまう。

カエルは逃げ遅れた。ヘビの気配に気づくのが遅かったからだ。

ボクも手遅れか？ いや、悲観的になってなんかられない。

相手との距離は充分にある。体力もまだ残っている。

しかし、不利な状況に変わりはない。ボクはこの山の土地勘がない。何の思惑もなくひた走っているが、この先に突破口があるのか。それとも一定の進路を、間抜けのようにぐるぐると回っているだけなのか。そんなことすらわからない。

再度、確認になるが、相手は複数だ。相手に土地勘があり、そして聡明な生き物なら、ボクはあっけなく追い詰められてしまうだろう。

直進。右折。左折。逃げる、逃げる、逃げる。

……ランダムに進路を変更しているのだが、どうにも振り切れそうにない。彼らはとてもしつこい。ボクが疲れるのを待っているか

のように、近過ぎず遠過ぎずといった距離を保っている。さりとて気配は消さない。大きく吠えたり、黙ったり。ボクの不安心を煽るような、ずる賢いやり方をする。

さて、どうしよう。正攻法は通じない。

ならば、奇策か。そう、奇策だ。奇策でしか、現状を打破する方法はない。

体力にも限りがある。玉砕覚悟で博打を打つなら今しかない。生きるか、死ぬかだ。

一方で、奇策を実行するための条件がある。

それは水場の存在。できれば、流れのない水場。水深は、なるべく深いほうがいい。

この山には、ため池がある。どこにあるのか、今となっては見当もつかないが、とにかくどこかにはあるはずだ。

そして本題だ。水場で、一体何をするのか。もちろん、身投げはしない。それでは本末転倒だ。泳いで、彼らから逃げるのだ。もし彼らに飛行能力があれば、この策は台無しになる。だが、彼らが走って追いかけてくることを考えると、彼らに飛行能力は無さそうだ。さらに楽観的な予想をすると、彼らは普段陸上で生活している生き物なので、わざわざ水場にまでは追ってこないだろう。

ボクも陸上で生活をしている生き物に分類されるが、実は泳ぎは得意だ。昔、みっちゃんと一緒に川で泳ぎの練習をしたことがあるから。

きつと、大丈夫。昔のボクにできて、今のボクにできないはずがない。

そう信じながら、午前中の再来だ、水場を求めて無心にあちこちを駆け回る。追い込まれる前に。体力が尽きる前に。

足音が近くなった。彼らは左右の後方にいる。

二匹だ。二匹、だけだ。もつといるのかと思っていた。胸に安堵のひと滴が広がった。

そう油断したときだった。右の前足が地面を捉えずに、空を切った。走っている最中だったから、当然、バランスを崩して——ふわっと身体が浮いた。

ボクは、暗闇に飲み込まれた。

天罰

坂道を転げ落ちている感覚があった。身体のいたるところに衝撃を感じると同時に、視界がコマ送りのように一時停止するのだ。なぜか痛みはない。だが、衝撃を感じる部分に、極度に冷たいものを当てられたような感覚がある。熱いような、冷たいような。痛覚が麻痺してしまっているのかもしれない。

唐突に、とまった。いや、違う。動き出したのか。ボクはやつと自由に動けるようになったのだ。

ぼうつとした頭で考えていると、坂の上からけたたましいおたけびが響いた。反射的にびくつと身体が縮こまった。——そうだ、逃げなければ。

幸いながら足は動いた。痛みを感じる部分はない。

さらに幸運は続いた。少し移動した先に、ため池があったのだ。あのおぼれかけたため池よりも小規模なサイズの池だ。

刹那、ボクの脳天に、雨がぽつんと当たった。ボクは顔を上げた。

そうだ。——もし彼らが坂を下ってきたときに備えて、ため池の対岸まで泳ごう。

念には念を。安全には万全を。

思い立ったがすぐ実行だ。軽い助走をつけて岸際でジャンプ——着水。今度は沈まない。沈む前にもがく。前足左右と後足左右を交

差させる形で、もがく。すると、水面の上に顔を出したまま前に進むことができる。

すいすいと身体が進む。今ならみっちゃんよりも速く泳げるのではないかと、うぬぼれてしまうほどに。

かくして、ものの数十秒で向こう岸に到着した。おたけびはもう、聞こえない。

思わずため息が出た。全身の力が抜けて、岸際でへたり込んでしまった。急にまぶたが熱くなった――が、こらえた。のどの奥がちくちくする。こんな状態になったのは久しぶりだった。

ボクは涙を流しそうになっていた。でも、我慢した。泣くのが、怖かった。泣いたらどうなってしまうのか、わからなかったから。

振り向いて、水面に頭を突っ込んだ。無理やり息をとめる。何も考えない。冷静になろう。冷静になることだけを願おう。

……顔を出し、息を吸う。

……呼吸が楽になったら再び水面に頭を突っ込む。

それを繰り返していると、ほどなくして気分は穏やかになった。まだ身体は小刻みに震えているけど。

水面に、いくつもの波紋が広がった。ボクは鼻先を上に向ける。やがて本格的に雨が降り始めた。無数の雨粒が途切れることのない音を奏でる。

ぴゅーつと吹いた冷たい風が、木の葉を震わせる。

ところで、彼らに襲われた原因は、どこにあったのだろうか。まず思いついたのは、ネズミの死骸をくわえたまま山中を走り回ったことだ。この軽率な行動によって幾多の生き物に自分の存在を示してしまった。ならば必然、襲われる危険性は増えるというものだ。

今後の対策としては、正攻法で食糧を手に入れるよう努力することと、盗みはひっそりで行なうことだ。なんて、当たり前の教訓。しかし、そんな当たり前のことができないから、あんな無茶をしよう。

当たり前のことができないのは罪だ。そして罪には罰が与えられる。人の作る法律も、自然界の掟も、根源は変わらない。当たり前に背くと、天罰が下る仕組みになっている。

そのことを肝に銘じておこう。と、ボクは固く決意した——その矢先だった。

視界の半分以上を占める影。その一部分が動く瞬間を、僕は見た。

影に輪郭が現れた。犬の輪郭。ボクと同種の生き物の輪郭。一、二、三匹……と次々に影から浮かび上がってくる。

天罰はまだ、終わっちゃいなかった。

遠くで、空気の裂けるような雷鳴が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6374y/>

犬死

2011年12月13日23時47分発行